

事業活動実績報告書

施設名	幼保連携型認定こども園葛飾みどり
教育理念	自ら生きる とともに育ちあう
1 事業名	心の表現
2 実施期間	令和 7年 4月 1日 ～ 令和 8年 3月31日

3	取組概要	(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和7年5月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		各年齢ごとにハサミを使ってみる。ハサミはあそびの幅が広がり、様々な形に切ることができるということを知ると、そこからモノ作りへのイメージが広がっていくため、一人一人丁寧にハサミという存在を伝えていった。使い慣れている子もいれば、初めて使う子もいるため、全体に平均的に教えるのではなく、一人一人の技術に合わせてかかわりを持っていく。ハサミを覚えた子どもたちは、自分のイメージしたものを再現できるように工夫するようになった。あそびの中でも紙を切っておままごとで使用したり、空き箱に細長く切った折り紙をつけてクラゲにしてみたりと、想像したものを次々と作っていった。折り紙を折って切り込みをいれ、それを開くと雪の結晶になる、ということを年長から教わった年少が挑戦。できた雪の結晶をそのまま壁に貼っていたが、空間を使って雪が降っているように見える飾り方を提案。そこからどんどん雪の結晶作りが広がっていった。	
		(取組日) 令和7年6月1日 ～ 令和7年7月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		しばらく雪の結晶作りが盛ん。年中も混ざり始め、折り紙をいろいろな形に折り切り込みを入れて結晶を作っていたが、数をこなすごとに三角に折って切り込みを入れたものが最も雪の結晶に見える、ということに子どもたちは気が付いた。また、どんな色でも結晶を作っていたところ、年長が「雪」なので、白や水色青などがふさわしい、という意見がでて、年中年少もそのように紙を選んで結晶作りをしていた。切り紙のブームはまだまだ継続していく。この切り紙も、正方形から折ると正三角形になるなど、算数的な要素が大きいので、今後子どもたちの遊びがどのように展開されていくか見守っていった。	

3	取組概要	(取組日) 令和7年8月1日 ～ 令和7年10月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 白や水色などで雪の結晶を作ることが盛んになり、年長が「雪」から「空」を連想。空から降ってくる雪をイメージしたときに「空」そして「星」を連想。雪の結晶を作ると、星を描く人と分かれ始めた。また、自分自身の想像だけでなく、実際に図鑑を見たり大人に聞いたりしながら星へのイメージを膨らませていった。	 
		(取組日) 令和7年11月1日 ～ 令和7年12月26日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること プラネタリウムへ行った際に今作成しているもの(空や宇宙のイメージ)と一致する資料があったため参考にしていった。星は小さい○では無く球体になっていてそれぞれに名前があるということを学んだようだ。園に帰ってから、これまではちりばめた星を描いていたが、プラネタリウム後は惑星のようなイラストを描くようになった。園の中で一番空に近い場所は？という年長の声。3階のホールだと伝えと、そこで空を作って自分たちが考えた雪や星、惑星など浮かばせたいという気持ち。それを受けて大人がヒントを出し、子どもたちから「青いシートで空を作りたい」と案があった。大人数名と一緒に協力して園内に空が生まれた。	 
		(取組日) 令和8年1月5日 ～ 令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ハサミを使えるようになって、作りたいものが作れるようになり、たまたま切った折り紙が雪の結晶に見えて、そこから年少中年長一緒になって切り紙の流行が始まった。年少がうまく切れなかったときは年長と一緒に手伝うなど、異年齢のかかわりが広がったことも偶発の産物である。年長が卒園して小学校に行くことを知った年少が、覚えたハサミを一生懸命使って年長へ花束の贈り物を作ってプレゼントしていた。	
		(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和7年5月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	 

効果検証報告書(新規事業用)

施設名	幼保連携型認定こども園葛飾みどり
教育理念	自ら生きる とともに育ちあう

計画時	事業の区分(5領域)	幼稚園教育要領に示された5領域に該当するもの(複数可。最も当てはまるものには◎を選択してください)				
		健康	人間関係 ○	環境 ○	言葉 ○	表現 ◎
	1 事業名	新規事業 ○		継続事業		1 年目
		心の表現				
	2 事業概要	美術には答えが一つでないからこそ、いろんな表現方法を子供達自身で見つけ、試していきます。美術の中では何度も失敗が許されます。美術は頭と心をやわらかくします。たくさん試行錯誤ができるからこそ、自分のパターンを打ち破り、新しいパターンを作り出す事ができます。子供達にとって最高の遊び場で、最高の学びの場が美術教室にはあります。				
事業後	3 対象学級(クラス名) 対象人数	花組、雪組、星組			95 名	
	4 実施体制	美術の講師 絵具・粘土などの素材 様々な美術的技法 園庭の土や草花、水、氷など、自然から湧き出た素材も使用				
	4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 さまざまな材料を用意して遊びが展開していくよう準備していたが、予想していたこととは違って一つの取り組みに長い時間集中したように感じる。そしてその一つのことが縦のつながりに変わっていき、年長が加わったところから活動内容がぐんと広がっていった。				

5 取組の内容

計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等

●みてさわって、感じて描こう！

真っ白な画用紙にいきなり絵を描いていくというのは、緊張感を伴います。「自由に描いていいんだよ。」と言われると、何を描けばいいのか余計に悩んでしまうものです。教師はその子自身を認め、子どもの心をひき出すようなアプローチをしていきます。それによって子どもたちはわくわくしながら絵を描いていくことができます。子ども達が主体的に表現していく力を育みます。

●夢中になれるから、おもしろい。

高価な素材やキットではなく、身近にある素材を使い全く別の価値をもったものを作り出します。失敗したり、遠回りしながら、自分の力で、「これをこんな風に見てみたいかな？」と遊び心を通し試行錯誤する中で、「多方向から考え工夫していく力」を身につけます。「やった！できた！」という喜びが次にチャレンジする自信へとつながります。

●インスタレーションアート：空間全てを使って仲間と共にイメージを具現化する楽しさを味わい、想像力や表現力を育む活動

インスタレーション・アートでは、空間全体が作品になっていることから、その作品に全身を囲まれて空間全体を「体験」することができます。ネットなどのツールは目や耳に特化して作られていますので、使う感覚が制限されがちで、私達はほぼほぼ受け身になってしまいます。受け身ではなく「ぼく、わたしはこれをする！」という主体性を育むには、こういった体感できる空間アートはぴったりのカリキュラムです。目で見て、作って、触って、肌で感じて、五感をフルに使いながら時間をかけて積み上げて作る喜びや探究心、アートを楽しむ心を育てます。

数千個の紙コップを使った「紙コップのインスタレーション」、「宇宙」、「海の中」、「くまのお腹」、「雨」など、さまざまなインスタレーション作品の制作も行います。

●粘土はありのままの子どものこころを受け止めてくれます

粘土は取扱いやすく、容易に変形できるので、自分の手で創造する喜びを経験することができます。粘土は触覚的で自由度と可塑性が高い変幻自在な素材です。壊しても、たたいても、切っても、粘土は粘土のままであり、その形が変わるだけで、壊れて消えてしまうことはありません。よって、子どもたちの情動や感情をありのままに受け止め、吸収し、抑圧された不安や緊張、怒りや葛藤などの心を解放しやすい素材だといえます。

●体験していく技法

・デカルコマニー（紙などに絵具を塗り紙に転写して、絵具が混ざりあった模様を楽しむ技法）・染め色あそび・シャボン玉アート・引っ掻き絵・にじみ絵・吹き絵・はじき絵・葉っぱスタンプ・プチプチスタンプ・塩アート・意図引き絵・ビー玉アート・フロッタージュ・フィンガーペインティング・割りばしペン・ちぎり絵・ねんどで作ろう

（継続事業のみ記入）前年度の取組から発展させた点

5についての効果・検証

事業実績から推測される効果や改善点等

ハサミを知ることからどのような展開が生まれるかというところでは、保育者の予想をはるかに超えてきた印象。しかし、結果的には園全体を使って年少から年長までイメージを共有しながら『空』を作り上げていた。まだまだ流行は終わらない雰囲気、このまま引き続きどこまで広がっていくか見守っていききたい。

計画時

6 事業を通じて期待される子どもたちの姿や効果等

美術には答えが一つでないからこそ、いろんな表現方法をお子さん自身で見つけ、試していきます。美術の中では何度も失敗が許されます。美術は頭と心をやわらかくします。たくさん試行錯誤ができるからこそ、自分のパターンを打ち破り、新しいパターンを作り出す事ができます。

また、子供が作った作品こそが、その子にとっての答えであり、正解であり、個性です。子供たちは小学校、中学校、高校、大人へと成長が進んでいくなかで、つねに正解を求められます。でも美術という分野だけは、他から答えをもらえるわけではありません。正解を自分で作る、それが美術です。

それらを繰り返していくことで、自己肯定感を育んでいきます。偏差値教育とは異なり、美術のすばらしさがここに 있습니다。

また、心を表現するという部分では、子どもたちは絵を描く、工作、共同制作を通して、「自分の気持ちを表現する」「楽しそう！ やってみたい！」を形にしています。言語表現が未発達な子ども、感受性や表現したい気持ちは大人以上にたくさんありますので、美術ではそんな気持ちを受け止め、一緒に楽しみ一緒に感動していきます。

以下効果について

- ・感じた事や考えたことを自分なりに表現するようになる。表現したくなる。
- ・感じたことを表現することによって、『自分はこれでいいんだ、こう思っている』という自己肯定感が芽生える
- ・様々な素材から、自分でイメージを持ち、工夫してあそぶようになる
- ・自由な発想、創造性を育み『自分だから出来る表現』を作り出す力が育つ

事業後

6についての効果・検証

事業実績から推測される効果や改善点等

芸術には答えが無い、というところでは、もっと一人一人が個性に関わっていくものと想像していたが、例えばハサミだったらしばらくハサミの流行が続いたり、切り紙が流行したらしばらくそれが続いたりして、そこから一歩踏み出した世界観があるのかなのか迷った時期があった。子どもたちがひとつひとつ丁寧に向き合っていたためそのまま子どものやりたいことを見守り、子どもの発見を受け止め一緒に喜んでいった。あそびの展開がしばらくなかったことに対して、どこまで口を出すかの押し引きは難しかった。

7 効果検証総括

取組を通しての感想、今後の教育・保育に向けて

自らのイメージを大切に、としていながらも、子どものイメージを大人がどれだけ想像できるかで、言葉のかけ方が違ってくることを改めて感じた。『子どものイメージを膨らませることありき』で保育を営んでいると、それこそ強制になってしまう。とにかく私たちは、『自分自身にある先入観』を取っ払う必要がある。また子どもの表現をあまりにも専門的に見すぎてしまうことがマイナスに働くことにつながるという気がした。子どものありのままの表現を目に映す、ということの難しさを感じた。

※必要に応じて、別紙の添付やイラストの活用などにより事業説明を補足しても構いません(別紙は任意様式)。

※幼保連携型認定こども園教育・保育要領における教育のねらいや内容等については、幼稚園教育要領の5つの領域から構成されていることを踏まえ、本事業では「幼稚園教育要領」とのみ記載しています。